「出エジプト記」研究

植田重雄

はじめに

いかなる民族にも、民族形成の歴史をもつ。歴史は、個人であれ、民族であれ、その内部と外的状況において生じた出来事としての意味が語り伝えられる。イスラエルの民族共同体が、強力な指導者モーセによって形成されるに至った出来事は、旧約聖書の「出エジプト記」に記録されているごとく、時代の経過を経るにしたがって、ますますそのもつ意味が重大視されている。現代のイスラエルの詩人、インベル（G. F. Imbell）が、「シナイの山に集らなかった人々よ、シオンに来れ」と歌っている。イスラエル再建の源動力となったシオニズムの運動にふさわしい詩句であるが、それだけに、逆にモーセの民族的宗教的な運動の歴史的重大さがうかがえるともいえる。イスラエルの民族共同体の核となるモーセによるエジプト脱出の歴史伝承の意義は、ヘブライズムの観点から、宗教史的立場から、さらに文学的観点から、多方面にわたって綜合的に考察されねばならぬ。とりあえず、ここでは、モーセおよび部族がエジプトよりどの経路をたどり苦難の脱出を試みたか、荒野の漂泊をなしたか、また契約の地カナーンにはいっていったかについて、焦点をしぼって検討を試み、最終的な結論は今後にまつこととする。

歴史と伝承

エジプトに在住していたイスラエルの民族が、たんに少数のものでなく、集団をなして脱出を試みたという伝承は、王朝成立以後、文献に記録されるまで、かなり久しい間にわたって種々の変様をもたらしたとおもわれるが、その中心的部分はヘブライ人の精神に強烈といえるまでに不変的な要素を伝えのこしていった。文献に記録されない以前の伝承的な歴史を、いわゆる口承文化と称するが、これをわれわれは、軽々しく取扱ってはならない。記録文献の歴史が正確で、伝承文化が曖昧であるという区別は、近代の科学的な合理性に立つものである。むろん、歴史的文献が事実の忠実に記録しようとする意図がないわけではない。しかし、その事実にも、当時の人々の心意による解釈と、事実の選択があることは、否定できぬ。他方、伝承は一方において神話的表現、民間説話を包含しながらも、その背後にある出来事の意味が把握されているのであって、部分的に合理性に背馳しているからといって、これを無下に否定するわけにはいかない。じつは伝承も歴史も突如として、非連続的に生起したのではなく、両者の間には複雑で微妙な融合と推移をたどっている。もしここで、伝承のもつ特質の一つをあげるならば、伝承の内容には、民族のもつ創造力、いくたびも爆発し、燃え上り、反照するヴィジョンをもっているといえる。そして、歴史の中に共通の出来事として生きつづける。歴史は、伝承文化の母胎なしでは生じ得ないものともいえよう。

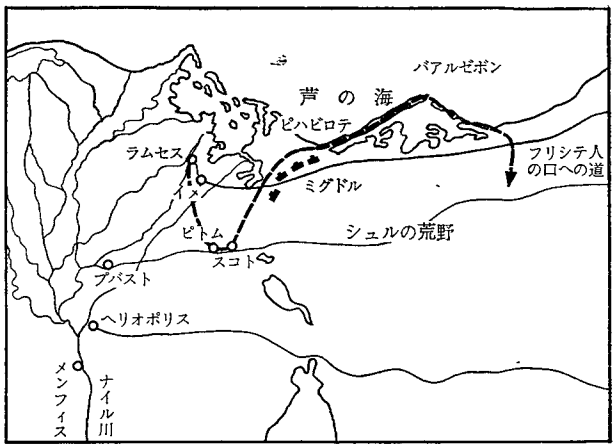
イスラエル民族ののこした「出エジプト記」には、この民族的な伝承性と歴史性がないまぜにとけ合っている。そのために、宗教的な見地からも、歴史的（現代的意味で）見地からも、そのとる見方によって、いろいろな特徴をわれわれに示す。そのもっとも大きな実例が、この出エジプト記であるといえる。

ここでは、イスラエルの民が、エジプトからの脱出を試みた経路と方向について検討して、その内容と意味について妥当とおもわれる線をさぐることとする。

カナーンへの路

伝承によれば、イスラエルの民は、ヨセフがエジプトに移住して以来、繁栄したが、王朝が変るとともに、奴隷の境遇におちた。そのとき民族の指導者として立ち上ったモーセにより、ひそかに脱出の計画がすすめられ、各地に集結し、一挙にエジプトの支配圏を脱れたのである。現今、歴史学者の説によると、この〈エジプト脱出〉を試み、モーセに導かれたのは、いわゆるエジプト在住の中でもヨセフ伝承をもっていた部族であり、全イスラエルの部族ではなかったといわれる。この説は妥当とおもわれるが、なおいかにして民族形成をなし得たか、その問題がのこる。もう一つ想定し得ることは、エジプト脱出は一回限り行われたのではなく、数度にわたり、また各地域においてなされたのではあるまいかということである。そうでなければ、エジプト脱出後、民族形成をおこなった出来事が説明できないようにおもわれる。ただし、紅海の奇蹟といった伝承に象徴されるように、モーセを主力とする脱出行為が、もっとも著明となり、他の諸部族の脱出伝承がしだいに吸収されるに至ったのではなかろうかともおもわれる。そこで、モーセ主力の脱出行と、他の諸部族集団の移動の事件とに分け、ここではもっぱら前者に焦点をむけることとする。

モーセとその一集団がラムセスを逃れでたあと、出エジプト記によれば、「さて、パロが民をエジプトより去らせしとき、ペリシテびとの国の道は近かりしかど、神は彼らをこれに導き給わざりき。神いい給う、『イスラエルの民、もし戦いを見なば、悔いてエジプトに帰らんことをねがわざらむためなり』と」(出エ、一三ノ一七)、〈ペリシテびとの国の道〉はエジプトからカナーンに至る最短の海岸沿いの路である。まづ掲載の地図(I)を参照されたい。大国エジプトにとって、シリア・パレスチナは、メソポタミアの諸大国と接触する緩衝地域であり、同時にエジプトの安



脱出略図 I

全を確保する前線基地であった。当時、エジプトは自給し得るナイルの穀倉地帯をもつ富裕な大国である。それゆえ、歴代のエジプトの諸王はこのシリア・パレスチナ地方の確保に腐心し、しばしば出兵したことがあり、したがって、各所に要塞を築き、守備隊を駐屯させていた、ラムセスから海岸沿いのこの路は、エジプトからアラム・ナハライームに走る主要な軍事的経済的ルートである。エジプト人はこれにエジプトの神、ホルス(Horus)の守護をねがい、〈ホルの路〉と呼んでいた。セト一世(Seti)の浮彫(ほぼ紀元前一三〇〇年、カルナック神殿の石壁)には、セイル(Sile)からラフィア(Raphia)に至る路を示す軍用地図とおぼしきものが彫られている。これは軍事的要地を砂漠ぞいに表わしたものであろう。この主要道路のほかに、プバスト(Pu-Bast, Bubastis)から、パレスチナに至る道があり、さらにメンフィス、あるいはヘリオポリスから、紅海の北限をとおって三日月型地帯にすすむ道路があり、この三路はいづれも、エジプトの死命を制するものであった。

セイルはこのカルナック神殿の浮彫の最右端に彫られており、おそらく、ナイル河の支流の東辺におけるエジプトの前線基地としてであり、ラフィアは左端の主要な要塞としてである。そしてこの両地点の間に約二十に及ぶ要塞と城壁が、エジプトに帰還しようとしているファラオの戦車を囲んでいる。まさにエジプトの軍事力の偉容を示す浮彫

である。エジプトを脱出しようとしたモーセは、契約の地カナーン（フィリシテ人の国）に真直ぐに向うには、この〈ホルの路〉をすすむのが、最短距離であるはずなのだが、今までのべたように、エジプトの前線の要塞（これは同時に都市を意味する）と軍隊が点在しており、そうしたところで遭遇すれば、エジプトの奴隷の集団逃亡と見做され、ただちにエジプト本土に強制送還されるか、拒めば戦闘を交えなければならぬ。イスラエルの民が戦闘を見て、エジプトを去ったことを後悔し、再びエジプトへ帰ろうとする気持が起ってはならぬ。モーセははじめからそういう考えがあったようである。まず第一にモーセのひきいているのは、イスラエルの民であって、戦闘部隊ではない。またエジプトの軍団と戦闘を交えるためのものではなく、あくまでも奴隷の生活から砂漠の民として自由を求めるためのものである。そこには老齢者も、女性も、子供も交っている。むろん、若き男子をはじめ武器をもち得る人々はみな武器をもち、部族の人々を守るようにしていたではあろうが、まだ強力なエジプト軍との戦闘に耐えるものではなかった。かりに戦闘をすれば、この老人、女性、子供たち非戦闘員が手足まといになるし、さらにできるかぎりの食料その他、必需品や多くの家畜を連れている。敵はかならず、この非戦闘員を襲撃するであろう。エジプト軍はその誇る兵器に、戦車がある。これは二頭立ての馬に車をひかせ、その上から槍をなげ、矢を放ち、さらに、戦車に大鎌をつけて、疾駆してなぎたおす、当時においてはおそるべき武器であった。これは、徒歩の部隊の到底及ばぬところである。モーセの企図したことは、イスラエルの民の脱出を成功させるためには、エジプトの前線部隊や要塞とできるだけ接触しないようにすること、しかも、脱出を感知して追跡するファラオの軍隊から行方をくらまし、一刻も早く自由な砂漠の民となることであった。したがって、主要なカナーンへの路のいづれも歩くことを避け、きわめて辺鄙な地域をえらぶよりほかにみちはなかった。モーセとその一群がえらんだ道は、主要路をまづ縦断し、ミグドル（Migdol）から、北上し、スエズの海岸ぞいの進路をとったようである。

主はモーセに言い給う。「イスラエルの民に告げ、引き返えし、ミグドルと海の間にあるピハヒロテのまえ、バアルゼボンの前に宿営すべし。なんじらはここに向い、海のかたわらに宿営すべし。パロはイスラエルの人々が、『彼らはその地にさ迷い、荒野が彼らを閉じ込めたり』といわん」（出エ一四ノ一～三）

すなわち、モーセの一団は、スコテ（Succoth）から、シュル（Shur）の荒野を縦断し、〈蘆の海〉の要塞地帯をさけて、ミグドルの近くをとおり、ピハヒロテ（Pi-hahiroth）の近く、バアルゼプォン（Baal-zephon）のあたりに向ったようである。なお一般にこのスエズ地帯の〈蘆の海〉を〈紅海〉と訳し、〈紅海の奇蹟〉と呼びならわしているが、まったくの誤りであって、地理的にいう紅海は、スエズ地峡の南、エジプトとアラビア半島の間にはさまれている海である。この海が一時的にもせよ、干上ってモーセの一団を徒渉させたということは、事実なんら根拠がない。地中海に面したスエズ地峡一帯の海および海につらなる湖沼を〈蘆の海（ヤームスフ）〉（Yam Suf）と呼んでいる。エジプト人は、デュウフ（djouf）と呼びならわしており、現在はシルボニス（Sirbonis）湖という。以前はナイルの河口デルタ地帯から、シュルの荒野に至る範囲を指していたらしい（蘆の海がどうして紅海となったか、英語訳では、Reed が Red となり、一般化されたらしい。なおこの問題は、今後にのこしておきたい）。イスラエルの民はシュルの荒野の縁にとりついたが、要塞をさけて、海岸べりの進路をとった。その方が現代のわれわれを納得させる。同時に、出エジプト記に記載されている地名は、他の文化圏の記録でも実証できるのである。たとえば、前述のセト一世の浮彫には、ミグドルもエジプトの主要な要塞としてあがっており、またラムセス二世（紀元前一三〇〇年紀）の記録にも載っている。バアル・ゼプロンはカナーンの神バアルの名をとり、シルボニス（Sirbonis）湖の北岸に沿って細長くのびている半島砂州の湖口を扼している突端にある。航海の人々がここにバアルの神殿を祀ったらしい。イスラエルの民が脱出を試みた路は、普通のものでなく、この蘆の海の沼沢地にとったので、エジプトのファラオは、彼らがかならずや

沼沢地帯で道を迷い、行結ってしまうであろうと判断をくだしたのであろう。事実この地域は想像を絶する蘆と沼と砂州と泥濘地が入りくんでいるところであった。かりにエジプト側に立っても、この観測は当を得たものであり、路に迷って困憊して、引き返してきたところを捕えれば容易なことであったであろうし、奥へ進めば、ますます泥沼にはいってついに餓死するか、自滅するかであった。エジプトが確保している主要路と、要所々々に布置してある要塞や駅路の都邑をとおらず、人跡まれな危険地帯を旅をすることは、大抵は死滅を意味していた。

モーセによるエジプト脱出は、衝動的な行動ではなく、まして一時的煽動や興奮、今日ロマンチックに想像する無目的な彷徨ではなかった。むしろ、〈乳と蜜の流れる約束の地〉カナーンに自由を求めての脱出であり、一般のイスラエルの民はとにかく、この脱出行をはかったモーセとその指導者は、緻密で周到な計画があったとおもわれる。まづひそかに同族をエジプトから導き、できるかぎり、エジプトの軍隊に遭遇せず、荒野へと赴くことであった。しかしエジプト軍との遭遇追跡の危険を避けるためには、蘆の海へと迂回する危険はさけられなかった。いづれにしても九死に一生を得、死中に活を求めるほかにこの脱出行は成功のみちはなかった。ただし、エジプト軍や要塞のつづく主要路をたどるよりも、蘆の海の辺境へぬけてゆく方が、わずかに一条の光明があった。それはたとえ多くの困難がともなう迷路と沼沢地の連続であるにしても、ここから荒野へとはいってゆくことは、普通漠然と考えられているよりも、不可能な事ではない。問題は、エジプトの政治的軍事的勢力圏のこの地点をいかに脱出するかである。おそらく、モーセとその指導者たちは、シルボニス湖の周辺の地形、迷路の探索、あるいは地理に通暁したものの道案内があったにちがいない。モーセはエジプトの官憲に追われ、ミデヤンびと、エテロのもとに遊牧の生活をしたことがある。すでに〈神の山〉とよばれていたホレブ（Horeb）にものぼった。彼はそこでエジプト脱出の使命を感取した。このホレブの出来事は、シナイの契約の先体験であるが、彼がミデアン族から、この脱出の協力を得たことも十分考

えられることである。ホレブ伝説とシナイ伝説を区別して詮索する研究があるけれど、あまり意味がない。シナイ・ホレブは砂漠の民にとっていづれも神聖なる山岳であり、ここで牧畜をするものは、聖なる契約にはいらなければならないのである。これを厳粛に宗教的、歴史的に意味を把握したのが、モーセである。そのことはあとで触れる。ホレブは峨々としてそびえる岩山で、その周辺にはオアシスがあり、遊牧に耐える地域である。モーセはイスラエルの民を、自由な砂漠の民として導くことにあった。一体、モーセに導かれたイスラエルの民はどの位の人数であったか。出エジプト記は、女性と幼児を除いて徒歩の男子六十万と語っている。大略百四五十万近い人々が移動したとすれば、これは当時大変な事件である。この数字はおそらく後世の附加とおもわれる。ヨセフ伝承を伝える部族は、多くてせいぜい二、三万、大体一万を越えるものではなかったと見た方がよい。ただし、モーセのこの事件を契機に、エジプト在住のヘブライ民族、セム系の諸部族が、移動を行い、無数の脱出伝承を生んだのであろう。モーセの出来事に象徴されるこの民族移動と共同体形成の伝承は、これを背景にみると、かなりの数となって遊牧民が活動したとおもわれる。しかし、それはずっとのちの出来事で、現在問題にしているモーセのこれとは直接関係はない。

蘆の海の戦闘

モーセとその一団は、エジプト軍の遭遇をさけて、つとめて秘密裡に行動し、シルボニス湖の北辺にすすんだが、ここに予期せぬことが生じた。この辺境には、エジプト軍もほとんど駐屯しないのであるが、たまたま要塞防衛の勤務をおえて、本国に帰還しようとする一エジプト部隊に発見された。彼らはファラオからかねて遊牧（ヘブライ）の逃亡民があった場合、これをエジプト本土に連れかえるように、命令をうけていたらしい。本国帰還に際して、この逃亡民を捕えてゆくことは、よき武勲ともなることであった。しかし戦闘を交えるのは、モーセたちにとって不利で

ある。できるかぎり追跡をまぬかれる以外にみちはない。エジプトのこの部隊は戦車と騎兵と歩兵であり、装備としてはすぐれていた。ピハヒロテの附辺の海辺で宿営していたとき、発見された。エジプトの部隊は、早速自分たちについて本国に帰るように命じた。普通ならば、従順に彼らについて引き返えしたであろう。しかし、宿営の後始末をしたモーセとその一団は、急速に逆の方向へ移動した。彼らは夕闇にまぎれて、シルボルニスの湖辺の迷路にはいっていった。

このシルボニス湖は、現在サブカートバルダヴィル（Sabkhat Bardawil）とも呼ばれ、シナイ北岸の干潟湖で、潮の干満がはげしく、とくに地中海の風浪はげしきときは、海と同じような状況を呈し、淡水の沼がたちまち海水にひたされることがある。古代にはナイル河の分流がここにそそいでいたといわれる。〈蘆の海〉とよばれるごとく、人影をかくしてしまう蘆が生い茂っていた。この蘆はエジプト人のパピルスの原料になるもので、蘆の海とよぶのは一応の訳である。もっともパピルスの材料になる植物は、ナイル河のデルタ地帯には多く、ここだけにあるのではない。長くのびて地中海の波をさえぎっている砂嘴は、干上ったときには、陸路を無事にわたることができるが、一旦満潮ないしは風浪のはげしいときには、旅行者の生命をうばうこともあったと伝える。

もっともおそれていたエジプトの部隊との遭遇に、イスラエルの民からは恐怖の叫びがあがった。「われらエジプトに墓なければ、荒野にて死なせんために、われらを導きいだせしや。」（出エ一四ノ一一）「荒野に朽ちるより、エジプトびとに仕ふること、はるかにまされり」（同一二）こういった不安と動揺の中で、モーセは事態を見守っていた。この脱出の企ては、はじめから賛成したものもあるが、なかば半信半疑のものもあり、なかには反対のものもあった。相当裕福な生活をおくりエジプトの文化や習俗にすっかりなじんでいるものもいた。ピラミッドやその他王侯の墳墓は、エジプト人の文化の水準を示し、また富裕な市民の生活の支えでもあった。なにもエジプトから脱出した

くとも相当生活を楽しみ、快適な文化を享楽することができるはづである。こういった不平不満は一挙に爆発し、無暴なモーセの企てをいまさら後悔し、怒るものもでた。しかし夜のとばりがおり、潮波がけむり、イスラエルの部族とエジプトの部隊は対峙したまま夜を迎えた。それを聖書は「エジプトの軍とイスラエルの民の間に、雲と闇があり、夜もすがら彼此相近づくことなく、夜をすごせり」（同一四ノ二〇）と表現している。

エジプトの部隊からみれば、算えて一万位の逃亡民である。しかし、その全体の様子からみて、屈強の青年たちも交っているであろうし、ことによったら、おもいがけぬ装備をして抵抗するかもしれぬ。しかし、大勢からいって、命令にしたがうか、逃亡をするか、抵抗するか、いづれにせよ問題ではない。手兵は二千名位あり、全部が最強の装備を誇る精鋭である。命令にしたがはねば、追跡して一挙に戦車や騎馬で踏み蹴散らせばよい。とにかく、夜明けまで監視し、それから事をはこべばよい。こう判断したとおもわれる。

他方、モーセとその指導者たちは、この危機からなんとかして血路を見出すべく、協議した。この辺の地理に明るい者の知識が最大限に用いられ、また潮汐の干満の時刻と風の様子に注意をはらった。そして戦闘に耐える者は、武装をととのえ、老幼者と女性を守り、干潟をえらんでエジプト軍から逃れる途を講ずる。場合によっては、勇敢な青年たちの中から万一の場合にそなえエジプトの部隊と一戦を交え、できるかぎり追跡を食い止めるべく、決死隊がえらばれた。この計画を立ておえ、それぞれの部署をさだめると、モーセは主なる神に祈りをささげた。万事沈着にことをなさねばならぬ。この干潟湖沼は、モーセにとっても、エジプト軍にとっても、不利なものである。しかし、見通しは不可能事ではない。

夜明けが次第にちかづくとともに、イスラエルの部族は、ひそかに行動を開始した。夜の間、はげしくよせていた地中海の潮汐は、雲のようにけむって見定めがたくあたりを立ちこめていたが、今は遠く潮もひき、全体のようすも

はっきりしてくる。潮のひいた干潟を徒渉し、つぎの砂州にうつる。モーセは先導者を激励し、悲嘆を発する者がいると、叱咤し、殿軍にまわって、エジプト軍の状況を見た。エジプト軍もこの様子に気づきはじめた。命令どおり、エジプトに引返すとおもったこの逃亡民たちは、予想を裏切って、逃亡をつづけたのである。しかし、いよいよとなれば、猫に追われる鼠であり、まさに力の上では、鎧袖一触であった。部将は進撃を命じ、一せいに追跡をはじめた。モーセは殿軍の青年たちとともに立っていた。そして風の様子をみていた。潮はひいたが、その日は次第に東風が強まった。一たん退いた潮は、風とともに逆浪となって干潟を押し破って流れこんできた。シルボニス湖は、一たん干潟となれば、多くの砂州と島ができるかわりに、一たん風が激しくなると、まさに旅行者にとって地獄のような湖沼とかわる。先導者に導かれて、イスラエルの民はしづかにすすむ。それを見守りながら、モーセは殿軍とともに、退いてゆく。イスラエルを追撃するエジプト軍はじよじよにその距離をせばめたが、しかし、砂州から干潟、湖沼、砂州、蘆をわけての追跡は、一直線にすすんだわけではない。声がとどくところでは、エジプト軍はイスラエルの一団にむかって逃亡を停止するように命じ、なんどか威嚇した。だが、イスラエルは、黙々と行進をつづけた。両者の間には緊迫感がただよった。部将は一隊に迂廻させ、イスラエルの民の退路を断つように命じた。しかし、これは成功しなかった。砂州を迂廻してゆけばゆくほど、イスラエルの民から遠ざかってゆくことになった。

エジプト軍は、もはや威嚇ではなく、攻撃の姿勢をとり、槍先を前にむけ、砂州から干潟、浅い湖沼群をわたってすすんできた。夜はすっかり明け、進撃を開始してから、数時間を経過していた。その間に、風ははげしく、逆浪が湖沼に逆流してきた。エジプト軍は、自己の武力を誇っており、したがって自信にみちていた。地理に不案内なエジプト軍は、焦燥しはじめた。イスラエルの逃亡を目前にしながらも、なんどか湖沼や干潟がさまたげたからである。イスラエルの先導者は、たくみに陸地や砂州をもとめて移動していった。しかし、追跡のエジプトの部隊も、絶好の

捕捉撃滅の機会をとらえた。逆浪の滔々とよせる潟をへだてて、間近かに迫まったからである。迂回は困難である。一挙に潟をわたり、追いついて、ふみにじることができる。部将は今までの失敗をここで一気に挽回できると確信した。その対岸には恐怖と不安の思いでイスラエルの民がこの状況を見つめている。モーセは殿軍について、状況を見ては、命令を下していた。そして、異様なまでに怒る眼で、エジプト軍をにらみつけ、祈っているように太い杖を右手でふりあげたまま、つつ立っていた。それは長老か司祭者、すくなくともイスラエルのこの行動を指導している者のようにエジプト軍には見えた。彼の眼からはげしい火が燃え、追跡するエジプト全軍をその激しい怒りで追い返えすかのように、岩のごとく右手をふりあげていた。

エジプトの部将は、戦車と騎兵を先頭に水しぶきをあげて突撃をはじめた。しかし、状況は一変した。数時間、数十分の差が今までより危険な激浪の潟とかわっていた。押しよせる激浪で戦車は、横だおしになり、騎兵は浪にのまれた。干潟にも固い砂底のところもあり、水がひたっていても、浅いところもある。しかし、足を抜こうとすれば、抜くほど深く沈む泥底もある。威力を誇る戦車も騎兵も今やこの泥底にめりこみ、激浪に、もまれ押し流されて、悲惨な光景を呈した。部将が退却を命じても、退くこともできず、断抹魔の救いを求める声が各所からきこえた。エジプトの部将はただちに軽装の武兵部隊に、救援を命じた。それはイスラエルの民にとって、彼らを追跡する執拗な最後の攻撃のごとくみえた。今度は、身軽なエジプトの歩兵が浪を泳ぎきってくるであろう。ここで一戦を交えねばならぬ。イスラエルの青年たちは、武器をにぎりしめた。モーセはあいかわらず右手に杖をふりあげて、叫びつづけている。しかし、何を叫んでいるのか、人々にはわからなかった。喚声をあげ、突撃渡渉してくるかに見えたエジプト軍は中流に至って次第に乱れ、つぎつぎにおしよせる浪に押し流され、戦車部隊の救援どころではなく、散りぢりになり、味方に向って救いを同じように求めはじめ、悲惨な状況を培加することになった。ある者は戦車にとりついて

泣き叫び、ある者は馬とともに浪の中に飲まれ、何百というエジプトの兵士たちが失われた。なかにはイスラエルの民の避難している岸べにやっとたどりついた者があったが、イスラエルの勇敢な者が、脳天をたたき割り、朱にそまってたおれた。若干のエジプト兵がおよいできて挑戦する者もあったが、今や優勢なイスラエルの武装した人々によってたおされ、屍体は同じように浪の中に放りこまれた。そして、勝利の記念として、彼らの槍や刀を奪った。今まで恐怖におびえていたイスラエルの人々の中からこの事態に血が逆流するおもいで歓声がわきあがり、その歓声は大浪のようにとどまることを知らなかった。エジプト軍はイスラエルの逃亡民の追跡どころではなくなった。彼らこそ、モーセによって、このシルボニスの迷路に、誘導され、窮地にはまってしまったのである。浪はますますはげしく砂州を破って、あちこちからよせてくる。エジプトの部将は蒼白となり、追跡をまったく停止し、事態の収拾に、岸に近く泳ぎかえった者を救助するのに大童である。それにひきかえ、モーセは杖をふりあげたまま動かなかった。イスラエルの人々は、彼のこの姿に不思議な畏怖を感じた。怒ってエジプト軍を追い返しているようでもあり、祈っているようにも見えた。民をひきいて運命をきりひらく巨人のごとく見えた。モーセはエジプト軍の情勢を見とどけると、ただちに予定の脱出行の進路をすすむように民に命じ、少数の殿軍をのこして、シルボニスの砂州を脱れていったのである。勝利は決定的であった。エジプト軍は完全に混乱し、追跡を中止し、そこから引き上げていった。自ら手を下さずして、この蘆の海の勝敗は完全にイスラエルのものとなった。出エジプト記はこれをつぎのように記述している。「かくのごとく、この日、主はイスラエルをエジプトびとの手より救い出し給えり。イスラエルはエジプトびとが、海べに死ねるを見たり。イスラエルはまた、主がエジプトびとに行われたる大いなるみわざを見たり。かくて民は主を恐れ、主とそのしもべ、モーセとを信じたり」（一四ノ三〇、三一）。

他方、エジプトの側の記録をあげてみるならば、メルネプタハ王（Merneptah, 1235–1227）の戦勝碑に、「パレスチ

ナにおいて、要塞防衛の部隊、任務をおえ、本国帰還の途次、逃亡の遊牧民に遭遇し、これをシルボニス湖の海辺に追いつめ、これを撃破し、その子供に至るまで全滅したり。」事実は、まさに反対である。こうした嘘偽の報道は、今も昔もかわりないようである。敗惨の部将は、首都に帰ってどのように軍情を報告したのであろうか。またこの部将の報告を、ファラオたちはどのように受け取ったのであろうか。ただ、エジプトには、無数の戦勝碑や宮廷の記録がのこっているが、敗北し、失敗したという記録がない。アッシリア・バビロニアと戦った場合でもそうである。大国エジプトの衿持がそうさせたのか。エジプトの国民を偽瞞させるためであったか、とにかく、この時代モーセの脱出の出来事から、エジプトは次第に昔日のいきおいを失い、多少の変化はあっても、衰退の途をたどり、ついに古代エジプト王国はこの地上から消滅するのである。それはとにかくとして、遊牧の逃亡民の捕捉の失敗は、大国エジプトにとって、事件としてもとるに足りぬ些細な出来事であった。頻発する遊牧民の逃亡は、首都や神殿やピラミッドの建設のために、支障をきたすことであり、為政者にとって、頭を悩ますことになりはじめていたにせよ、まだ大きな問題ではなかった。

しかし、イスラエルの民にとっては、この蘆の海の脱出は、自分たちの全存在を賭けた運命的な出来事であったのだ。

アロンの姉、女預言者ミリアム（Miriam）は、タンバリンを手に取り、他の女たちもタンバリンを取って、つぎのように歌った。

主にむかいて歌え、
彼は輝やかしくも勝利を得給えり、
彼は馬と乗り手を海に投げ入れ給えり。

この前句を踏襲して、一般に「モーセの紅海の歌」といわれる詩がつづく。

主はわが力、またわが歌、わが救い、
彼こそわが神、われ彼をたたえん、
彼は父なる神、われ彼を崇めん。
主はいくさびと、その名は主。
彼はパロの戦車とその軍勢を海に投げ入れ給いぬ。
そのすぐれたる指揮者らは海に沈みぬ。
大水は彼らをおおい、彼らは石のごとく淵に落つ。
主よ、なんじの右の手は、み力により栄光にかがやく。
主よなんじの右の手は敵をうちくだく。
なんじは大いなるみ力により、
なんじに仇する者をうちくだき給う。
なんじ怒りを発するとき、
彼ら、わらのごとく焼きつくされぬ。
なんじの鼻の息により水はたたなわり、
流れは堤となりて立ち、
大水は海のさ中に凝り固まる。
……

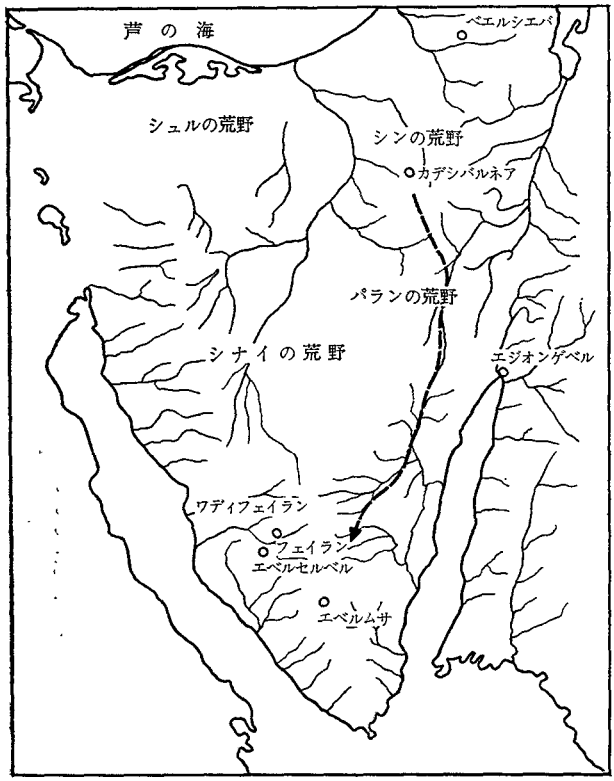
なんじが息を吹き給えば、
海は彼らをおおい、
彼らは鉛のごとく、大水に沈めり。
主よ、神々のうち、いかなる者をなんじにたぐえむ。
たれかなんじのごとく、聖くして栄えあるもの、
ほむべくして恐るべきもの、
くすしきわざをなすものあらむ。
なんじが右の手を伸べ給えば、
地は彼らを呑みつくしぬ。
なんじは、あがなわれし民を恵みによりて導き、
み力をもちて、なんじの聖きすまいへと導き給う。（同一五ノ一～一三）

この讃歌は、全部当時のものではないにしても、イスラエルの民の危機の逆転を目前にしての歓喜のさまが躍動している。ミリアムの単純な讃歌に、のちの時代に次第に歌詞がつけ加えられていったものであろう。それだけに、人々の心に強く深く焼きつけられた決定的出来事であった。この出来事は、のちに次第にセム系の遊牧部族に語り伝えられ、エジプトから脱れ出た他の諸集団にも異様な感動として広まるに至った。

エジプトの辺境部隊との奇妙な戦いを終えて、シルボニスの潟湖の周辺をはるかに逃れたイスラエルの民は、その東部の砂州を迂回して、〈ホルの道〉の主要路を人跡たえたあたりで通過し、シュル（Shur）の荒野へとはいってい

った。（以下略図Ⅱ参照）

「さて、モーセはイスラエルを蘆の海より旅立たせぬ。彼らはシュルの荒野に入り、三日のあいだ荒野を歩みしかども、飲むべき水を得ざりき」（同一五ノ二二）。あの蘆の海の出来事以来、モーセにたいし、脱出について半ば疑いをもち、消極的であった人々も、まだ漠然とではあるが、信頼をよせはじめる人々もでてきた。そして、全体は今までと異なり、異様な興奮と感動に包まれていた。それはエジプトにいた頃とは、はっきりと異る意識がじよじよに目覚めてきた。もはやエジプトの支配下に寄留し、生活は保証されはしたが、奴隷の状態にいるのではなく、たとえ多くの困難はあろうとも、自由な砂漠の民として立ってゆくこと、また一体、父祖の地とはなんであるのか。約束の国とはどこであろうかと、考えたりした。そして、右手に杖をふりあげて、エジプト軍を追いかえしたモーセという指導者が祈る〈主〉とは何であるか、



荒野略図Ⅱ

彼が〈ホレブの山〉で神の意志を受けとったということが何であろうか、〈燃える茨〉とは、〈永遠の存在者〉とよぶ神とは何か、理解しようと努力するものもあった。すくなくとも、彼らイスラエルの人々の中に、今までにない新しい意識、新しいしるしが、次第に彼らに生き甲斐を感じさせ、共同体として人間と人間の間に共通の新しい意味把握の感情がわいてきた。モーセは、寡黙の人であった。一説では、ひどい吃りであったともいう。それが分るのは、アロンだったともいう。とにかく、人々はこの鉄のように強い意志の持主、火のようにはげしいモーセの指導のもとに、エジプトの辺境要塞地帯を通過し、自由な砂漠へとはいっていったのである。ここにはいってから、もはや逃亡の民ではなく、遊牧民であり、たとえエジプトの要塞の部隊に発見されることがあっても、不必要な戦闘を挑まなければよいのである。シュルの荒野は、エジプトの対パレスチナ地域の前線であり、ここの確保がナイルの穀倉地帯を安全にする地域である。しかし、イスラエルの民は、この荒野で三日間歩いたが、水を得られなかった。ある地点では、水は湧いていたが、苦い水であった。人々の中にはシルボニスのあの出来事の感動を忘れて、モーセにたいし、「われわれにこんな水を飲ませるのか」と不平をいった。モーセは一本の樹木をきりたおし、その樹液をまぜると、その苦味がうすれ、飲めるようになった。渇きを耐えているより、苦味をうすめても、飲むことが必要であった。砂漠の民はこのようにして渇を医やす方法を知っていた。しかし、エジプトの豊饒な平原や都市の生活に同化したイスラエルの民は、これが異様なことのようにおもわれた。シュルの荒野は黄色い砂の砂漠と、岩石砂漠が入り交っている。灼けつく太陽のもとを幾日も歩むのは、イスラエルの民にとって、新しい体験であった。

「かくて、彼らはエリムにたどり着きぬ。ここには泉十二、なつめやし七十本あり。かれらは、このところにて、水のほとりに野営せり」(同一五ノ二七)

モーセの一団が通過した荒野の地点は、一つ一つ確定することは、不可能である。エリム(Elim)もその一つであ

る。ただ今日でも荒漠たる人跡まれな地域で、遊牧のベドウィーン族が放牧するぐらいである。砂漠といってもワディ（Wadi アラビア語）と称する谷間があり、雨がふると滝のように流れるが、末端はみな砂や砂石に吸われて、跡かたもなくなる。しかし、伏流がしばしば泉となって湧くところがある。こういったオアシスにはなつめ椰子などの植物が繁茂し、人間のいこいの場所となり、定住も不可能ではない。砂漠の民は、このワディやオアシスを求めて旅をし、これらの周辺にひろがる牧草地に放牧するのである。エジプトを脱出してから、一ヶ月半にして、シュルの荒野をすぎ、シン（Sin）の荒野にはいった。この荒野はシュルからエベル・ヒラル（Jebel Hilal）を距てて、東部にあり、その南方にはパラン（Paran）の荒野、さらにシナイ半島全域を含むシナイ（Sinai）の荒野がある。これらはほとんど、気の遠くなるような荒涼とした砂漠地帯である。

エジプト脱出、要塞地帯の迂廻、シルボニスの戦いの困難にもましてこの荒野の彷徨は苦しいものであった。水の欠乏、食料の不足が、士気を沮喪させた。モーセは砂漠の民の知恵を用い、マンナを食料にかえて人々に与えた。マンナ（Manna）は檉柳などの灌木につく〈かいがら虫〉である。アラブ人はこれをマン（Man）とか、マン・ミンサマ（Man Min Sama 天から降るマンナ）と呼んで、砂漠における非常食とする。この荒野では七、八月頃発生するという。一説には、マンナはやはり、砂漠に生ずる地衣類であるともいう。イスラエルの民は、「われらはエジプトの地において、肉のなべのかたわらに坐し、飽くほどパンを食べをりしとき、主の手にかかりて死ぬべかりしに。われらをこの荒野に導き出し、すべてのものを餓死せしめんとするなり」（同一六ノ三）という不平と不安がたえずおこった。渡り鳥のうづらが大群をなして野営しているイスラエルの民のもとに舞いおり、これを捕えて食べたこともある。モーセがシュルの荒野から、シンの荒野にはいったのは、充分な意図があった。そこには、カデシ・バルネア（Kadesh-Barnea）がある。ここは強力なエジプト軍をもってしても追跡を思い止まる辺境地帯で、もとよりカナーンの

諸軍事都市の同盟軍も踏みいることはない。いわば、砂漠の諸部族の揺籃の地であり、集結の地点である。おそらく、カデシ・バルネアで、エジプト各所から脱出した諸部族とここで合流し、さらに古くから居住していた広い意味でのセム系の諸部族、ヘブライ諸族が参加し、ここに一大部族連合が結成されたのであろう。むろん、その中心的な力となったのは、モーセの指導するイスラエルの民であった。モーセという強力な意志と人格的スケールがこれを可能ならしめたといってよい。彼らはエジプトを脱出し、エジプトを否定したけれど、その身につけたものは、ここに新しく意味をもつようになった。装備も他部族よりすぐれ、その当時の世界情勢の一切の判断も、まさっていた。むろん、シルボニスの決定的な勝利の出来事は、口々に広まってゆき、みじめな砂漠の諸族に希望と勇気を自覚させた。モーセの空をにらみつけている態度には、新しい民族共同体の創造への情熱がみなぎっていた。しかし、ここで部族の結合ができたといっても、それだけでは不十分である。もっと強力な結合が必要である。それはこのイスラエル共同体がたんに人間と人間の契約をなすだけでなく、すべての者が、モーセの体験した永遠の主と契約にはいることによって、不動のものとなる。モーセは、ホレブの山の自己の体験を、もう一度新たにこの共同体の人々に知らしめ頒ちたかった。いや、自己を含めてすべての民が（今はそうよんでよいとおもうが）、新らしく神との契約の体験にはいることこそ、いかなる困難をも貫いてなさねばならぬことであった。砂漠に生きるものとして、もっとも苦しい障害に出合っても、このことは実行されねばならぬ。行動的なモーセはこれを実現すべく民をみちびいたのである。

シンの荒野を越えたのち、モーセはイスラエルの民を、レピデムに野営させた。そこも水の乏しいところであった。ところが、ここでイスラエルは、はじめてアマレク族と戦闘をまじえた。アマレクびと（Amalek）は、砂漠に出没する盗賊的な部族で、エジプトの要塞諸都市を襲撃したり、隊商を捕えたり、砂漠を彷徨する他部族をおそって掠奪を

ほしいままにしていた。このラピドデにおいて、アマレクびとは旅で疲労しきっている非戦闘員をおそい、殺傷し、所持品を掠奪した。「彼らは道にてなんじに出会い、なんじがうみ疲れているとき、うしろにしたがえる弱き者を攻め撃てり」（申命記二五ノ一八）。モーセは戦闘の指揮者として、若いヨシュア（Joshuah）にゆだねていた。この卑劣なアマレクの襲撃に、モーセは激怒し、ヨシュアに戦闘を命じた。シルボニスのときのように、彼は丘の上に立ち、杖を右手にふりあげて、戦況を見守った。戦いは一進一退をつづけ、アマレクは頑強な抵抗を試み、戦闘が終ったのは、日没すぎてからであった。多くの屍体をのこして、遠くに逃げたアマレクびとを、ヨシュアは打ち洩らしたのを残念がった。しかし、はじめて行ったこの戦いの勝利に、みなは一様に興奮し、砂漠の戦いに明るい自信をもち、意気天をつくものがあったのだ。モーセは、丘の上に祭壇を石でつみ上げ、〈主はわが旗〉とそこを呼んだ。そして、モーセは「主の旗に向い手を上ぐ、主は世々アマレクと戦い給わん」（出エ一七ノ一六）とさけび、この砂漠の民にあるまじき掠奪を企てる卑劣なアマレクの名を地上から消し去ることを誓った（出エ同、申二五ノ一九）。

モーセはシナイに向う途次、妻の父、かつて、彼をホレブの山に導いたエテロが、モーセの妻子をともなって、訪れ、再会の喜びを頒ち合った。それにもまして、エテロを喜ばせたのは、シナイの神の山に向い、そこでイスラエルの部族連合の最終的な仕上げとなる神とイスラエルの契約にはいることであった。これは同時に、現実的には、今までエジプトやカナーンの諸都市にたいし、散発的であったヘブライ系の諸部族が結束して、大きな力をあつめ、新しい歴史をきりひらくことになるからである。エジプトを脱出した逃亡民の中に、このような力の源泉があることを、むろん、エジプトの部将も、ファラオやその首脳部も知らなかった。それは彼らのまったく知ることのできぬ荒涼としたシナイの神の山で行われた。エテロは砂漠に生きてきたミデヤン族の首長として、モーセに砂漠における生活のあり方、防衛の方法、掟の規定など、さまざまの事柄に示唆を与えたらしい。エテロは多くの困難をおかして、ここ

までイスラエルを導びいた若いモーセの勇気と忍耐と知力を頼もしくおもい、ヘブライの部族の運命をきりひらくために、彼の最大限の助力を惜しまなかった。しばらく滞在したのち、エテロは部族のものと、モーセの成功を祈りながら、別れを告げた。むろん、少数のものは、モーセのもとにとどまり、神の山における契約に参加したとおもわれる。また、エテロの意を体して、モーセたちに道案内やその他のことに協力したのであろう。

「モーセとイスラエルは、エジプトを出でしより、三ヶ月目、シンの荒野レピデムよりシナイの荒野に旅出てり」（出エ一九ノ一二）

エジプトのラムセスより数えて、九十日目にイスラエルの民をモーセは自己のいだいていた神と民の契約の場に導くことができたのである。

ここでイスラエル人にとって、砂漠がどのような意味をもっていたか、簡単にのべておくことにしよう。イスラエル人が砂漠の民であったかどうか、風土論的に規定するような意味合いからは、現在にわかに断定しがたい。ただ砂漠に異常な関心をいだき、深い交渉をもちつづけようとしたことは、十分に認められる。カナーンに定住し、農耕生活にはいり、都市を建設したのちも、イスラエルの為政者や文化のあり方を批判する声のおこったのは、砂漠からである。たとえば、預言者たちの先駆者ともいうべきナジリート（Naziriť）とよぶ禁欲の宗教共同体の人々は、都市や農耕の生活を嫌い、砂漠にはいり、そこで清浄な生活を求めた。エリヤ、エリシャたちも、その後の預言者たちも、一度は砂漠にはいっている。「荒野に呼ばわる者の声、主の路をそなえ、主の大路を直くせよ」（第二イザヤ四〇ノ三）はのちのイエスの時代には、「荒野に呼ばわる者」（マタイ三ノ三）として、一種厳粛な態度で、ヨハネやイエスの劇しい言葉に、イスラエルの人々は耳を傾けたのである。つまりイスラエルにおける預言者運動は、この砂漠と無関係に成り立ち得なかった。人間のあり方を反省するとき、砂漠の中にはいって神の声をきくという行為がしばしば

見られる。農耕をいとなみ、都市を築き、豊饒と富裕の生活をなすこととは、正反対の極として、砂漠の生活のあり方が、イスラエルにかならず働きかけるのである。砂漠において大自然は、人間の存在にたいし威圧的で対立的になるとともに、人間の微少性を自覚せしめ、また厳粛感をひきおこし、清浄性を与えるものである。そこには、世俗性にたいする神聖性、宗教性が内蔵されている。荒涼として不気味な砂漠（荒野）は、その意味で、イスラエル人に深い関係をもっていたのである。モーセがエジプトを脱出して、ただちに、カナーンに向わずに、いくつかの荒野の中に踏み入って、神の山にたどりつこうとしたことには、二つの意図があった。エジプトを脱出したイスラエルの民はさきにもふれておいたように、エジプト平原の都市生活、富裕ではあるが非人間的な生活を一切払拭すべく、砂漠の大自然で民族として鍛えることであり、したがって、民族としての共同の生存の連帯感をもつこと、さらに、苦難と戦闘に耐える人間をつくってゆくこと、そして、人間として、清浄感、厳粛感をもつようになることにあった。ここに至って、現実的にもヘブライ民族の部族連合が真の強い結合力をもつに至るのである。

「すなわち、かれらはレピデムを出立し、シナイの荒野に入り、野営せり。イスラエルは山の前に野営せり」（出エ一九ノ二）いよいよ聖なる山に近づいたのである。この山がどこにあるか、聖書は他の地名のように明らかにしていないし、現在でも明確にすることができない。この聖なる山は〈畏れ〉の宗教感情から、永遠に沈黙が守られているのは、もともとこの契約の行為が宗教行為より出ているからである。ビザンツのキリスト教徒は、この聖なる山を、シナイ半島の南部の山脈の中心にそびえている〈ムサの山〉（Jebel Musa モーセの山の意、標高二五五五m）と同一視している。そのふもとに、今日、エル・ラハ（Er-Raha）とよぶ谷間があり、伝説によれば、ここでイスラエルの民は、モーセが山にのぼっている間、待機していたといわれる。しかしここには、泉が乏しく、不可能であり、それよりも三〇マイル距ったフェイラン（Feiran）には豊富に泉がわく。しかし、山自体は峨々として荒野にそびえ、

見る者に畏怖を念をおこす偉容をもっている。これより北西部にワディフェイランの谷を擁するイエベル・セルベル(Jebel Serbel, 標高二〇七一m)の巨峰がそびえている。ここはモーセが主なる神の啓示の体験を受けたホレブの山である。

モーセはひとり山にのぼり、神に祈り、神の言葉をきく。「……もしなんじらが、まことにわが声に聞きしたがい、契約を守らば、すべての民にまさり、わが宝とならん。全地はわがものなればなり。なんじらはわれにたいし、祭司の国となり、聖なる民とならん」(同一九ノ五以下)。モーセは各部族の長老をよび、神の言葉をつたえ、民は一せいに「われらは主の語り給うことを、みな行わん」とこたえた。モーセは民がみだりに山に近づかぬように、境いをもうけ、身体、衣服をきよめさせた。三日目に濃い雲とともに雷鳴がとどろき、電光がひらめき、全山は震動し、煙がのぼり、火を噴いていたとつたえる。これが火山活動であるかどうか詮索の必要はない。神と人間の契約はかかる表象をとおして、成り立つのである。モーセは山をおり、神の語った言葉を民につたえた。

「われはなんじの神、主なり、なんじをエジプトの地、奴隷の家より導き出せし者なり。

なんじはわがほかは、なにものをも神とすべからず。なんじはおのれのために、刻める像を造るべからず。……なんじの神、主なるわれは、熱烈なる(ねたみの)神なれば、われを憎むものには、父の罪を子に報いて三四代に及ぼし、われを愛し、わが戒めを守るものに恵みを施して、千代に至らん。

なんじは、神、主の名を、みだりに唱うべからず。

安息日を覚えて、これを聖めよ。六日の間働きてなんじのすべてのわざをなせ。七日目はなんじの神、主の安息なれば、いかなるわざをもなすべからず……。

なんじの父と母を敬え。こは、なんじの神、主が賜わる地において、永く生きんためなり。

なんじは殺すべからず、
なんじは姦淫すべからず、
なんじは盗むべからず、
なんじは偽証すべからず、
なんじは他の家をむさぼるべからず。……」（同二〇ノ二一～七）

イスラエルの民は、畏怖のおもいで、モーセの行動を見守り、彼に訴えた。「なんじがわれらに語りたまへ。われらは聞き従わん。神が直接われらに語り給わざるように。しからずんば、われらは死なん。」そこでモーセは民につたえた。「なんじら恐るべからず、神はなんじらを試みんために、恐れを目の前におきて、なんじらが罪を犯さざらんために臨み給うなり」（同二〇ノ一九、二〇）。恐れを恐れぬように、恐れを示したことは、一見して、自己矛盾のように見える。しかしこれはすべて、神と人間が契約にはいるための大前提であり、試練である。いわゆる恐れの感情、〈おそれの神祕〉（Mysterium Tremendum）は、宗教体験の重要なモメントである。これは主知的に理解する意味での恐怖ではなく、したがって、人間の心理の一側面ではない。主知主義者が誤って、宗教の起源を恐怖に見るということは、全然誤りで、あくまでも崇高なもの、自己を超えて向い合っている永遠の存在者への畏敬感である。現実には両者の混合形態があって、しばしば誤解をうけるが、人間の純粋な宗教性の自覚をともなう宗教運動があるところには、かならずこの崇高なものへの畏敬感がはたらいている。モーセのこの聖なる山における神とイスラエルの契約は、一面に歴史的伝承的敍述をとりつつも、人間のこういった畏敬感が焦点をなしているのである。この最初にあげた神の教え、十ヶ条は、一般に「十戒」とよばれているもので、ヘブライ人の宗教的倫理的な根本原理となっている。民族伝承の観点からいえば、アブラハム、イサク、ヤコブ以来の人間のあり方をここに集約的に表現し、人間

の間における倫理とせず、神の意志と人間の意志の契約授受の把握としたところに、重要な問題が示されている。モーセは何度も山にのぼり、このあとにつづく法的律法、性的律法、祭司規定の諸律法をイスラエルの民に伝えるが、それらは同時ではなく、ずっとのちの時代に附け加えられたものであろう。そこには、メソポタミア平原、カナーンの諸文化、エジプト文明に見られぬ厳粛で崇高な正義（Mishpat）につらぬかれた倫理観、人格的な存在感が見られる。契約という意味が、このシナイの出来事ほど、深く体験されたことは、当時のいかなる文化、法典にもないといってよい。人間と人間の契約のために、神の前に立つことはあっても、神が人間にその正義と愛（ヘブライ語では両者を同一語 Mishpat で表わすことが多い）のゆえに、契約を立てると思惟することは、このモーセによって、一層明確となったのである。

「モーセはきたり、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げぬ。民はみな同音に答えていう『われらは主の語り給えるみ言葉をみな行わん』」（同二四ノ三）。ここでいう神の「すべての言葉」は、ヘブライ人の神への聴従、応答の行為として、それ以後のイスラエルの歴史の出発点となる。イエスの運動も、ハッシディズムの運動もみなここを源泉とするのである。聖なる山のふもとに祭壇をきづき、十二の柱をたて、雄牛をほうり、契約の書をよみあげ、その雄牛の血をイスラエルの民にふり注いだ。モーセに導かれて、アロン、ナダブ、アビウ、さらに従者としてヨシュア、各部族の長老たちは、身をきよめ、衣服をあらため、断食して、聖なる山にのぼり、おそるべき一夜をあかした人々は、霧のはれるのをまって下山した。遠い空に太陽ののぼる気配がし、埃りっぽいエジプトのデルタ地帯の平原や砂漠の地帯では見られぬ壮厳な山気が彼らを包んだ。異様な感動をもって、人々はこの神々の座にあって平原とは異る清澄な空の大気のサファイアのような美しさにひたり、神の身近かさを感じながら、食事をしたためたのである。それを聖書はつぎのように表現している。「彼らがイスラエルの神をみると、その足の下にはサファイア

の敷石のごとき物あり、澄みわたるおおぞらのごとし。神はイスラエルの人々の指導者に手を下したまわざれば、彼らは神を見て、飲み食いせり」(二四ノ一〇、一一)。

この神との契約を確かにするために、モーセはヨシュアをつれて、再び山にのぼり、そこで石の板を彫り、それに神の教えを書こうとして、アロンその他の人々にイスラエルの部族をあづけてのぼっていった。聖山は雲におおわれ、モーセは四十日、四十夜そこで十戒を彫り刻んだのである。これは神の聖き民となるための最後の困難な仕事、まさに難行苦行であった。時日が経過するうちに、人々は不安を感じ、ことによったら、モーセは神の怒りにふれて死に、行方不明になったのではないかと動揺しはじめた。アロンに迫まり、モーセは、どうなったかわからない。金の耳飾りを集めて、子牛を鋳造し、神として祭って、饗宴した。山をくだってきたモーセはこの有様をみて、怒りのあまり、その彫り刻んだ石板を投げうつて、こなごなに砕き、祭壇の子牛の像を火で焼はらってしまった。偶像崇拝の習俗になじんできた部族にとって、モーセが伝える神の言葉による畏敬は、不可解であり、たやすく人間のつくり上げた象徴を求めたがる。こうしたイスラエルの民の躓きもかえってモーセの宣言する「主」の崇高で熱烈な人格的関係を一層強く結合する機縁となった。

モーセはふたたび石板に主の言葉を刻んだ。それはエジプトの言葉でも、カナーンの諸語でもなく、ヘブライ語であった。そしてそれ以後はこれを聖なる箱におさめ、イスラエルの民のゆくところに、すすむのである。聖なる山において、この力の神、正義の神、創造の神である主とモーセの対話は、滔々と奔流のようにあふれ、生き生きとして各所に書きとめられている。そのひとつをここにあげてみよう。モーセは主に語った。「見たまえ、主よ、なんじは『この民を導きのぼれ』とわれに言い給えども、われとともにつかわさるる者をいまだ知らせ給わず。なんじはかって『われはなんじをえらべり。なんじはわが前に恵みを得たり』と語りたまう。われもし、なんじの前に恵みを得な

ば、ねがわくは、なんじの道を示し、なんじをわれに知らせ、なんじの前に恵みを得させたまえ。この民がなんじの民なることを覚えたまえ』。主はいう『われ自らなんじらとともにゆかん』……『ねがわくは、なんじの栄光をわれに示したまえ』主はいう『われはわがもろもろの善をなんじの前に通らせ、主の名をなんじの前にのべん。われは恵まんとする者を恵み、あわれまんとする者をあわれむ』（同三三ノ一二～一九）。モーセは神との契約に入り、恵みの中にありながら、有限の人間であるがゆえに、神の栄光を直接見ることすらあえて望んだのである。しかし、彼は主の栄光の通りすぎるまで岩かげに臥し、手で目をおおっていたとつたえる。

モーセは困難なエジプトの脱出、荒野の旅をなして、ここにヘブライ系諸族を結集して、神との契約をなしとげ、一大連合の共同体を結成することに成功した。しかし、彼の悩みは大きく、聖なる山での神への祈り、神との対話は長くつづく。自己の力では耐えられぬような試錬、その仕事の大きさに、別の指導者に代ってもらいたかった。ホレブの山で燃える茨の中に感取した神の意志は、この聖なる山において、具体的に実を結んだ。このあとは、新しい指導者によって、この生れたばかりの新しいイスラエルの民の運命を拓いてもらいたかった。しかし、神と彼の対話にみるごとく、神はモーセをえらび、神自身がともに導くことを語っている。さらに苦難をともなう〈乳と蜜の流るる〉約束の地、カナーンへ進む大事業は、彼をおいてほかにない。ここまできたイスラエルにとって、モーセを信頼している各諸部族にたいし、エジプト脱出がさうであったように、カナーンへ向うことは、ただ一すじの道、ほかに代ることのできぬ道であった。燃える火のような主の言葉の中に、モーセは胸が苦しくなるような奇妙な感動をしばしば感じた。それは、創造の主ということである。メソポタミアの文化も、エジプトやカナーンの宗教も、ある種の天地創成の由来についての創造の観念をいだいていた。しかし、モーセが感取していたものは、これとちがっていた。このなすあたわざるなき創造の主の前にあっては、大国エジプトもアッカドも、カナーンもすべてみな被造の存

在である。彼らがこの地上に生を営むのは、すべて創造の主の意志による。その意志は、人間の理解を超えてはいるが、その意志を受け入れ、その意志に参与することはできる。正義を貫く神の意志のまえに、大国も小国もあり得ない。罪は罪であり、恵みは恵みである。カナーンにせよ、エジプトにせよ、かつては遊牧の民の自由の天地であったはずだ。しかるに今はどうか、イスラエルはそこで奴隷の境遇におとしめられ、あるいは辺境に迫い払われ、苦役に傭われる身となっている。モーセは、厳粛な聖なる山における契約の中に、ふたたび、力強い使命を感じとり、正義の怒りに燃え上った。そしていくたびも、祈りをささげた。モーセは人間の慾望のために、神の名を唱え、神々を利用し、偶像をつくり、神殿をきづく、諸都市の文明の嘘偽を見抜いていた。彼は神に祈らぬときは、長老や部族の青年たちに、この世界の悪と不正への怒りを披瀝した。奴隷の文明エジプトへの怒りは、他の諸都市文明への怒りとともに燃え、共通の合言葉となった。モーセとイスラエルの民が到達した神観念は、丁度塵埃に汚れたエジプトの生活と、砂漠にそびえたつ山岳の清澄さのちがいがあった。イスラエルはまだ都市一つ、神殿一つ、いや、まだ文明とよぶべきものは、なにひとつもたないけれど、この荒涼たる砂漠の奥地の聖き山のもとで、当時の文明の到達したいかなる精神よりも、調子のことなる新しい創造の熱火にふれていたのである。異る習俗をもちよって集ったこのイスラエルとよぶヘブライ系の部族は、たんに砂漠の民という環境の類似、利害による結合ではなく、今や神の聖き民として、生ける神への信仰の中心をもつに至った。

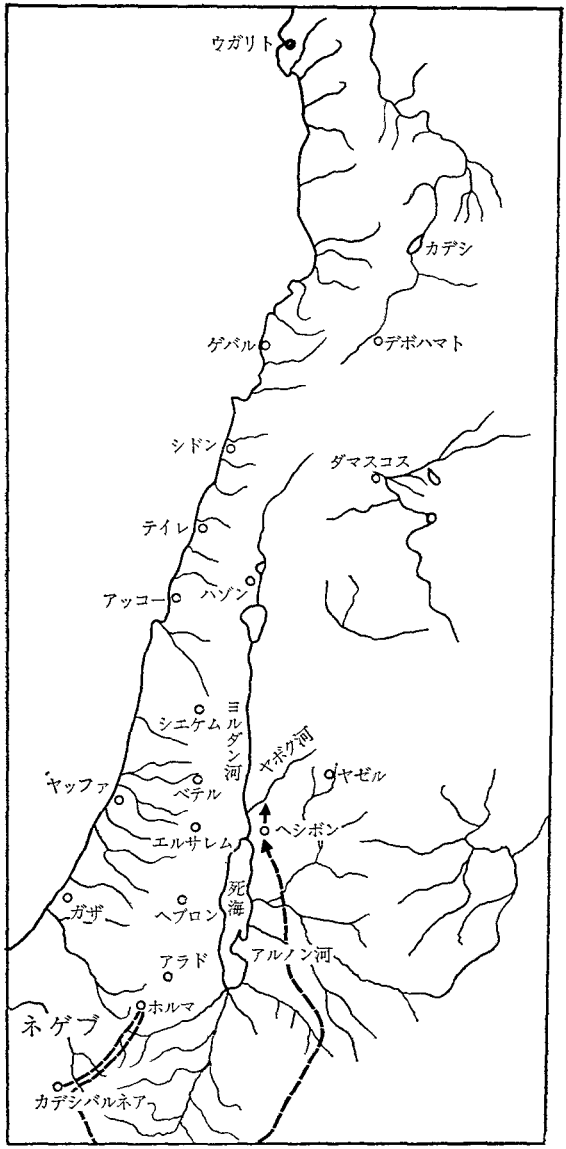
モーセの指揮のもとに、すでに先発の偵察隊は、アモリびと、ヘテびと、ペリシテびとなどの建設している諸都市の偵察に向っていた。モーセとアロンおよび長老たちは、滞在期間の許すかぎり、ここでイスラエルの民の共同体のあり方を考え、隊伍を分ち、訓錬し、戦闘に耐えるようにし、各地に散在する砂漠の民に、新しい神の民の啓示をつたえ、その連合をはかったのである。

モーセによって主の言葉はイスラエルに伝えられた。「われは紅海よりペリシテびとの海に至るまで、荒野よりユウフラテス川に至るまでを、なんじの領域とし、この地に住む者を、なんじの手に渡さん。」（同二三ノ三一）イスラエルの部族の進撃がはじまった。約束の地カナーンへ向うのである。しかし、どこから進み、どこへはいってゆくか、まだ判然としない。モーセは偵察隊の情報を待ったが、いづれも、攻略の不利をもたらす暗いものばかりであった。カナーンの諸都市の軍事力は、想像以上に強固であり、エジプト脱出の事業よりはるかに困難なものであることが、予想された。イスラエルの隊列は、十戒を納めた契約の箱を先頭に、つぎの歌を歌って進んだ。

主よ、立ち上りたまえ、
なんじの敵の打ち散らされ、
なんじを憎む者どもを
なんじの前より逃げ去らしめよ、
そして休憩するときには、
主よ、帰りたまえ、

イスラエルのちよろずの人々のもとに（民数一〇ノ三五、三六）と歌った。ふたたび、荒野の旅がはじまり、餓えと渇きの苦しい旅の中で、モーセは各所に多くの偵察隊を派遣した。これからは一層周到な準備が必要である。軍事的に強力であるかないかということも重要であるが、ただ攻略するだけでは十分ではない。そこに部族が住むために、土地の肥瘦、産物の種類も問題になる。偵察隊はネゲブにはいり、ヘブロン、エシコルの谷、レホブの探索からはじまり、ガリラヤの北部ハゾル、ゲバルの北東部ハマト（Lebo-Hamath）にまで及んだ（以下、略図Ⅲ参照）。その情報によれば、ネゲブにはあの掠奪の民アマレクびとが播据し、山地にはヘテびと、エブスびと、アモリびとが居を

かまえ、海岸とヨルダン河谷にはカナーン人が強固な軍事力を擁していることが知らされた。彼らは各同盟を結び、砂漠の部族の襲来を防衛するであろうし、イスラエルの民を簡単に入れるとはおもわれない。イスラエルの民はモーセにむかい、「われらはエジプトの国にて死ぬることぞよかりしに、荒野にて死ぬることよかりしに。なにゆえに、主はわれらをこの地にともない、敵の剣に倒れさせ、われらの妻子を餌食とし給うや」また「われらはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰らん」（民一四ノ二、四）といってなげく者もあった。しかし、情勢判断に敏いヨシュア



カナーンへの進路略図Ⅲ

は進撃をモーセにすすめたが、モーセはとりあえず荒野のカデシ・バルネアに退き、綿密な作戦計画をたてはじめた。その間、無暴にもネゲブの山地に、進んだ一部の部隊はかつて砂漠のラピドテで打撃をうけ、復讐にもえたアマレク族がカナーン軍と結んで攻撃し、その部隊は壊滅し、四散した人々をホルマまで追ってきた。死海西岸のカナーンの諸部族、諸都市はエジプトの辺境要塞地帯に接して、かなり強固であることが判明した。そこで、死海東岸のモアブの地を通過し、まだ他の部族の定着していない場所を求め、そこで一時定住することにきめた。攻略の戦闘を止め、遊牧の民として、エドムの王にモーセは使者を派遣し、イスラエルの民が侵略の目的でなく、一切の約束を守って貴領地を無事通過させてほしいという旨をつたえたが、エドムの王は大軍をひきいて、これを拒んだ。そのために、カデシを出発したイスラエルは、エドムとの国境ホル山(Hor)にのぼった。ここで一戦をまじえなければならなかった。エジプトを脱出以来、苦難をともにしたアロンはこの山で死んだ。人々は三十日の間、その死を悲しんだ。ところが、ネゲブに居をかまえていたカナーンのアラデの王は、イスラエルが通過するときき、アタリムの道をとって、軍を派して攻撃し、数人の者を捕虜とした。モーセはじめイスラエルの部族は憤つた。彼らは遊牧民として通過して北上し、彼らの領土を侵すつもりはなかったからである。主なる神に祈り誓いを立て、「もし、なんじ、この民をわが手に渡したまわば、これらの町をことごとく滅さん」(民二一ノ二)。アラド(Arad)は、すでに紀元前四千年紀に建てられた古い都市で、考古学的発掘が今日行われている。カナーン諸都市同盟の強力な首盟都市の一つであった。しかし、イスラエルの諸部族は必死であった。ついに戦闘が開始され、凄愴な死闘が繰返えされ、聖なる山を出でて、はじめて、イスラエルは、正面きっての総力をあげての戦いを試みた。そして、各所から火があがり、カナーン軍は敗退した。初戦に人々は凱歌をあげたが、遠くは追わなかった。今までの砂漠の民の失敗は、カナーンの縦深の反攻を甘く見たからである。主力は予定どおり紅海のみちをとおり、死海東岸に向ってすすんだ。モーセとヨシュ

アの意図したのは、なるべく抵抗の少ないところをえらんで、イスラエルの諸部族に生活の場を与え、じよじよに国力、兵力を養い、父祖との契約の地カナーンを手中におさめることにあったようである。しかし、カナーンの先住の諸部族、諸都市はこのアラデの王の敗北を不吉な予感のように感じた。今まで侵入してくるたびに、撃退した砂漠の貧しい生活の低い粗野な部族とは、異るものが、そこにあった。何か人間的に底の方から目覚めたような力があり、しかも、整然としたなにか新しい秩序と規律をもっていることが感じられた。彼らは深くも侵入せず、引き上げたイスラエルに不気味な前ぶれを感じはじめていた。しかも、アラデを攻撃したのちに、この部族はカデシに退き、どこへ移動したのかも分らなかった。

モーセとその民イスラエルは、通過を拒絶したエドムを避けて、東にすすみ、モアブの山地をとおって、オボテにすすみ、イエアバリム（Iye-Abarim）に野営した。イエアバリムは死海に注ぐ谷の一つである。そこからさらにキル・モアブ（Kir-Moab）、ラバテ・モアブ（Rabbath Moab）を経てすすんだ。むろん、この地域はカナーン諸部族の辺境地帯であるが、モーセとヨシュアはすでに先発隊に偵察を十分にさせて、じょじょに主力をすすませた。モアブとアモリの境界をなすアルノン（Arnon）川に近づいたとき、モーセはつぎに通過すべきアモリびとの王シホンに使者を派遣し、エドムの王にのべたごとく、通過許可を申し出た。シホンという王は、先住のモアブの王を追い出して、王となった梟雄である。彼は許可をあたえるどころが、急いで軍を集め、攻撃の準備をととのえた。ヨシュアのひきいる精鋭は、国境を突破し、ヤハズで遭遇し、激しい戦いとなった。しかし、多くの試錬をつみ、神の契約に生き、約束の地を目ざす必死のイスラエルの諸部族は、この谷で、シホンの主力を壊滅させ、文字どほり、完全な勝利を得たのである。そしてつぎつぎと都市を攻略し、その附属の村々を手中におさめ、さらに北部の要路ヤゼル（Yazer）を急迫した。ここには、かなり堅固な要塞があったが、シホンの主力軍の壊滅したアモリの抵抗は、激しく怒る獅子のご

とき、イスラエルの攻撃の前に、くだったのである。かくて、イスラエルの諸部族はモーセとヨシュアの指導のもとに、カナーンの辺境地域に、自らの力で確保する範囲をもつに至った。その範囲はエドムと境を接するアルノン河から、死海の北岸、ヨルダン渓谷が死海に流れ入るヤボク（Jabbok）河に及ぶに至った。しかし、この攻略の結果をきき怒ったバシヤンの王オグ（Og）は、エデレイにおいてイスラエルの部族を迎えうち、はげしい抵抗を試みたが、敗退した。イスラエルは急追し、これをことごとく破っていった。このようにして、イスラエルの民の軍は、死海北東岸の地域を確保した。しかし、まだヨルダン河をわたって豊饒の地、カナーンの地にははいることはできなかった。エジプト脱出行、イスラエルの共同体、聖き民の結合のためにその生涯をつくしたモーセは、〈乳と蜜〉の流るる約束の国を前にしながらピスガの山のいただきから彼方を望んでその悲愴な生涯をとじたのである。彼の歿後、若き民族の指導者ヨシュアにその精神はうけつがれモーセが夢に見た待望の事業をなしとげる。しかし、それはアラデやヤハズの戦いよりもさらに激烈で執拗な戦いであり、苦難の多い、戦闘と生活の経営と建設を同時に行わねばならぬものであった。それだけに、砂漠の中において清浄のもとに、神の示す道を歩むことを誓ったイスラエルにとって、大きな試錬に向うこととなり、最大限の知力と生命力が発揮された。

他方、カナーンの諸都市は、自らの形成し維持している文化と軍事力を誇りながらも、砂漠の奥地から嵐のように襲来してこの野生的で新しい生活規律をもつヘブライ系の諸集団が、つぎつぎと諸部族、諸都市をなぎたおして、持続的に根を下ろしてゆくその威力の前に、戦慄を感じたのである。むろん、彼らも必死の抵抗を試み、戦闘と妥結、一進一退をつづけ、まさに一種の混沌状態の中から、パレスチナの歴史は、新しい局面を展開してゆくのである。そういったことについてはまた稿を改めて論ずることにしたい。

（昭和四十年四月十日、未完）